

2021 年度 第 2 回日本肺高血圧・肺循環学会理事会 議事録

日時：2022 年 3 月 6 日（日曜）13 時～16 時

場所：Zoom 開催

出席理事：巽浩一郎、伊藤浩、伊藤正明、江本憲昭、荻野均、桑名正隆、小垣滋豊、近藤博康、佐藤徹、下川宏明、瀧原圭子、伊達洋至、田中住明、辻野一三、土井庄三郎、中山智孝、福田恵一、福本義弘、室原豊明、松原広己、安岡秀剛、渡邊裕司 21 名

欠席理事：伊達洋至 1 名

報告事項

1. 2021 年度会計報告（年度途中）

収入

- 1) 学会員の年会費（450 万円）
- 2) 第 6 回学術集会余剰金（土井庄三郎会長）（67 万円）
- 3) HP バナー広告代（11 万円）の 3 項目のみ。

支出

- 1) 会員管理システムをレタープレス社にて構築、会員管理、会費請求業務分担。年間支出 70 万円くらい。
- 2) HP の修正、管理、会員の先生方へのメール配信（理事長 担当）レタープレス社から配信。学術集会担当 JCS から会員の先生方へのメール配信も、同様にレタープレス社から配信。レタープレス社の HP 管理費など年間経費 40 万円くらい。
- 3) 成人 PPS 調査事業費は、千葉大学から郵送。学会封筒の印刷費、郵送料金 13 万円。
- 4) 理事会承認の診療ガイドラインアプリ（Smart 119 で作成中）。医学生、研修医、専攻医を含めて、肺高血圧症に対する啓蒙。170 万円くらい。
- 5) 学会としての活動を継続、別組織の予算（厚労科研、AMED など）を利用
- 6) 八巻賞、学会奨励賞の収支は別会計、八巻賞は東北大学の故 八巻重雄先生（PH 病理医）からのご寄付、2021 年度 学会奨励賞の収入は学会の趣旨に賛同したヤンセンからの 400 万円（単年度会計）
- 6) 次年度繰越金 4,700 万円くらい

2. 学会会員数（年会費納入者とイコールではない）

2021 年度会員内訳（2021.4～2022.3）

2022.2.28

会員（医師）	530
会員（医師以外）	50
休会	5
功労会員	6
在籍合計	591

入会手続き中 12 名を含む

入会・退会動向

2021 年	
新規入会者数	退会者数
40	16

3. 2022 年度 日本肺高血圧・肺循環学会学術集会開催に向けて

桑名正隆 理事から

小児肺循環研究会と共同開催で準備中、HP でプログラム公開中、一般演題 96 演題、小児循環器関係 20 演題を応募頂いた

共催は肺血管拡張薬の製薬会社だけでなく、膠原病治療薬関係の会社、デバイスや医療機器メーカーにも共催をお願いした

4. 2023 年度 日本肺高血圧・肺循環学会学術集会開催に向けて

江本憲昭 理事から

2023 年 6 月 3 日（土曜）、4 日（日曜）神戸国際会議場で開催予定

副会長として、循環器内科、呼吸器内科、膠原病内科の先生からの内諾は頂いた。

5. 2024 年度 日本肺高血圧・肺循環学会学術集会開催に向けて

福本義弘 理事から

2024 年 6 月上旬 久留米市内のシティプラザで開催予定

6. 2022 年度 新理事会の開催

功労会員 5 名の理事は除き、2022.4.1~の新体制（理事長、副理事長の選出）に関して、2022 年 3 月に新理事会を開催する。現体制の理事長、副理事長で 4.1 以降残留するのは副理事長の桑名正隆理事である。4.1 からの新理事を加えて、桑名正隆理事から新理事会の開催を招集する。功労会員予定の 5 名は任期内であるが参加しない。

7. 2022.4.1~功労会員

伊藤正明、佐藤徹、下川宏明、瀧原圭子、巽浩一郎の 5 名の理事が功労会員となる

8. 2021 年度 日本肺高血圧・肺循環学会 学術講演会報告

土井庄三郎理事から

2021 年 5 月 6 日~8 日 於：京王プラザホテル（新宿）

土井 庄三郎 会長のご尽力により第 27 回 日本小児肺循環研究会との合同開催に成功

5 月 6 日に web 理事会開催、2nd EASOPH を中国主催の代役として日本で開催

635 名の参加者あり、新型コロナウイルス感染症蔓延の中ハイブリッド開催にも関わらず、余剰金を学会に頂いた。余剰金は、今後、小児 PH レジストリー、小児 PAH 診療ガイドライン作成などの費用補填に使用する予定。

2021 年度日本肺高血圧・肺循環学会 Young Investigators Award (YIA) 賞

基礎系最優秀 YIA 賞

浅野 遼太郎（国立循環器病研究センター 心臓血管内科部門肺循環科）

腸内細菌叢変容は肺高血圧症病態の重要な予後関連因子である

基礎系優秀 YIA 賞

(1) 柳澤 洋（京都大学大学院医学研究科 循環器内科学）

C 型ナトリウム利尿ペプチド/GC-B 系の肺高血圧症における役割

(2) 五天 千明（金沢大学附属病院 循環器内科）

肺高血圧症病態形成における Ngfr 陽性細胞の関与について

(3) 上木 裕介（順天堂大学医学部 循環器内科）

肺高血圧症と副甲状腺ホルモンの関連性についての検討

臨床系最優秀 YIA 賞

桃井 瑞生（慶応大学医学部 循環器内科）

肺動脈性肺高血圧症と診断された患者における EIF2AK4 変異

臨床系優秀 YIA 賞

(1) 井窪 祐美子（千葉大学大学院医学研究院 呼吸器内科学）

CTEPH 患者における腸内細菌叢の変容(Dysbiosis)と病態との関連

(2) 中村 順一 (北海道大学大学院医学研究院 呼吸器内科学教室)

肺高血圧症の死因解析-各群の特徴を実臨床でどう活かすか

(3) 今西 洋介 (大阪母子医療センター 新生児科)

当院過去 30 年間における慢性肺疾患に伴う肺高血圧症の長期予後

9. CLARITY survey 進行中

CTEPH 治療にかかわる世界中の専門医にヒアリングを行い実態調査を目的とする国際共同研究 (担当: 九州大学, 阿部弘太郎)

10. 「青黛による薬物・毒物誘発性肺高血圧症に関するステートメント」を作成、HP 公開済み

難治性疾患政策研究事業「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班」の金井隆典先生 (慶應大学消化器内科教授・慶應大学医学部長) より青黛服用者における肺動脈性肺高血圧症合併スクリーニング法についての意見を求められた

(産業医科大学 片岡雅晴、国立循環器病研究センター 中岡良和、巽浩一郎の合同で作成)

11. 成人発症型の末梢性肺動脈狭窄症の調査研究継続中

(担当: 国際医療福祉大学 田村雄一)

12. 肺高血圧症 診療ガイドライン アプリの作成中 (Smart 119)

(担当: 巽浩一郎)

13. CTEPH 診療ガイドライン 2022 作成中

(担当: 巽浩一郎、田邊信宏)

14. PVOD/PCH 診療ガイドライン 2022 作成中

(担当: 巽浩一郎、田邊信宏)

15. PoPH 診療ガイドライン 2022 作成中

(担当: 巽浩一郎、田村雄一)

16. リオシグアトおよびアタザナビルの併用に関する意見作成

PMDA からの依頼 (担当: 巽浩一郎、渡邊裕司)

16-1. リオシグアトとアタザナビルの併用の臨床上の必要性はありますか。根拠となるガイドライン、文献等の記載とともにご教示ください。

→ HIV 感染が肺動脈性肺高血圧症のリスク要因となり、合併例が認められることは広く知られている。

「肺動脈性肺高血圧症と HIV 感染症を合併している患者」に対して、肺動脈性肺高血圧症の治療薬が HIV 感染症に有用であるという報告はない。逆に、HIV 治療薬が肺動脈性肺高血圧症に有用性があるという報告はない。したがって肺動脈性肺高血圧症と HIV 感染症のそれぞれの治療薬であるリオシグアトとアタザナビルの併用の臨床上の必要性はあるものと考えられる。

16-2. リオシグアトとアタザナビルの併用禁忌を見直し、両薬剤を併用可能とすることによる、臨床上の懸念や弊害はありますか。

→ 併用禁忌から併用注意に変更した場合、薬剤相互作用は弱いながらも存在する可能性がありますので、少量からの投与などの用量の配慮、また注意深い臨床上的の症状観察 (特に血圧低下) は必要と思われます。

審議事項

1. 学会の在り方に関して

日本における肺高血圧症領域の臨床、研究、教育に関する学会としての取り組み

学会の収入は、1) 会員の方々からの会費 (1 万円×人数) と 2) 学術集会の余剰金の 2 つである。年間収入がおおよそ 500 万円。

2018年度～2020年度の3年間はGSKの医学教育助成金を獲得（年間500万円、単年度決済）したため、学会運営に余裕があった（学会主催の講演会の開催、診療ガイドラインの作成など）。

Web 学術集会になる前からの学術集会の在り方です。参加者の半分は学会会員ではありません。学術集会に参加するだけなら、学会員になる必要はないと考えておられる方々が参加者の半分です。これは第1回の佐藤徹先生の学術集会から同じ傾向が続いており、昨年の土井庄三郎先生の学術集会でも同じです。

（学会の立ち上げ時）PH患者数は限定的、PHを自分のフィールドに入れている医師も限定的、この環境下で2つの学会があるのは、若手の混乱を招き、日本のPH領域の衰退につながるという危機感があり、本学会が立ち上がった。

学術集会は年に一回の開催になった。2つのレジストリーが同時並行しているのは奇異である。一つにまとめるべきである。

学術集会の開催のみだと、PH診療、研究に従事する先生方の増加は期待できない。学会賞授与の設定は学会員に限定した。

臨床研究に関与して頂くためにレジストリーへの参加呼びかけを継続している。PH患者さんへの情報提供のため、学会HPからのPH診療施設の公開を行なった（これがほぼPH専門医に該当）。

診療ガイドラインの作成は学会として必要と考え、Minds認証の診療ガイドラインを作成してきた。

（以下、議論要約）

福田理事

学術集会参加費：学会員と学会参加者の乖離について：学会員と非学会員の参加費が同額の場合、学会員であることのメリットが感じられていないのでは？

学会参加費を学会員では安くする方法がある

専門医について：そろそろ専門医について考慮すべき

桑名理事：学術集会参加費については前年度を踏襲することを考えていた。学会員/非会員での参加費用の差は、学会参加者の減少につながるリスクもある。副会長とも相談して決めたい。

巽理事：学術集会運営としては参加費用よりも共催セミナーの方が額がはるかに大きい

瀧原理事：福田理事に賛同。非会員での参加費用の差は2000円～3000円なら参加者が減るとは思わない。

会員であることのメリットを打ち出していくべき。

会員の方の参加を促すために、座長の参加者を増やす等の工夫が必要。

共催セミナーに関してはカテーテルのデバイスが重要だろう。

専門医制度についても前向きに検討すべき。

佐藤理事：BPAのカテは保険収載された。1社かどうかはわからない

福田理事：BPAのカテについては、CVIT、日本循環器学会、本学会合同で申請していけば追加承認は得られるだろう

桑名理事：2022年学会でもニプロやカネカにも共催いただいた。ただ2社合同や共催費の減額等もあった。今後は大きな額の共催は得られにくいだろう。

2. 評議員の在り方

学会立ち上げ時点から、評議員の選定は、その個人のプロモーションのためにしてきた。

会員全員が評議員はバランスが悪いので、それは避けるべきと議論された。450名の会員に対して評議員61名のバランスはどうか？PH診療、研究に従事している医師は希少であるので、数は問題でない、教室代表の先生は評議員とすべきの意見が主であった。

当初はすべての領域から評議員を捻出するために、理事1名あたり2名の評議員推薦とした。

理事22名（循環器内科9名、呼吸器内科3名、膠原病内科3名、小児循環器3名、基礎2名、血管外科2名）、評議員44名（循環器内科18名、呼吸器内科6名、膠原病内科6名、小児循環器6名、基礎4名、血管外科4名）のはず。

新規評議員17名が承認された。循環器内科28名、呼吸器内科10名、膠原病内科8名、小児循環器8名、心臓血管外科3名、基礎3名（循環器内科）の合計61名となった。

評議員の在り方は？

評議員会は、学会設立当時 レジストリーの説明会として開催したのみ。評議員会の在り方は？

（以下、議論要約）

- 福田理事：PH は各領域のマイナー分野と言える。教室代表の先生で興味がある先生は積極的に評議員になってもらい、どんどん学会に参加してもらおうべきでは？（でないと学会が縮小していくリスクがある）
- 福本理事：評議員会はやったほうがよいと思っている。大まかな人数制限は必要だろうが、評議員は増やした方が盛り上がるのでは？
- 福田理事：日循では、法人になってからは、評議員会は学会と別に集まっている。
- 巽理事：評議員会をやったとして、ほとんど委任状になってしまうのでは？
- 学術集会の中でやるのはスケジュール的に難しい
- 前日に評議員会を開く？
- 下川理事：評議員数に関して：本学会の目的は PH 診療の均一化であるため、科長の先生等は積極的に増やしていくべき。
- 渡邊理事：評議員会は賛成。懇親会の直前等は？
- 人数にこだわらず、学会に貢献してくれる人には積極的にになってもらおうべき。
- 瀧原理事：評議員は、特に学会費の納入を authorize すべき。
- 巽理事：事務局から会費の督促はするが、受け入れてもらえない？
- 福田理事：循環器学会は 3 年会費の未納があると除名としている
- 瀧原理事：循環器学会のように、未納の先生の上司、推薦して頂いた先生に納入を促してもらうのは？
- 桑名理事：2022 年の学会で評議員会は可能（2 日目の朝が空いている）
- 辻野理事：3 年未納は除名で仕方ないと思われる。逆に興味のある先生は評議員としていくべき
- 評議員会は出席率が低いことも予想され、会後に内容について通知も必要だろう
- 巽理事：評議員会に関して、本理事会で承認、要請という形でよいか？
- 瀧原理事：賛同
- 桑名理事：2 日目の朝に 9 時～9 時半で準備します
- 瀧原理事：そこで新理事長に挨拶してもらおうのが良いと思います。

3. 日本肺高血圧・肺循環学会学術集会と日本小児肺循環研究会合同開催

第 6 回日本肺高血圧・肺循環学会学術集会（土井庄三郎会長）と第 27 回日本小児肺循環研究会の合同開催から joint での開催開始

第 7 回日本肺高血圧・肺循環学会学術集会（桑名正隆会長）と第 28 回日本小児肺循環研究会の合同開催は理事会でのメール審議にて決定

今後の継続性に関する承認（担当理事：土井庄三郎理事とする）

日本小児肺循環研究会のメンバーは、日本肺高血圧・肺循環学会と一体になり All Japan 体制で診療・研究などの学会活動を実施することで、皆様の合意は得られている

日本小児肺循環研究会のメンバーとして重要なことはレジストリやガイドライン作成など小児領域での取り組みであり、学会の中に委員会的なものを作ると言うことで合意が得られている。

日本小児循環器学会 30 施設の幹事が存在している状況、年会費は無く、参加費のみで運営してきた。おそらくは 60～80 名ほどは会員になるものと考えられる。研究会への参加人数は毎年増減はあるものの 100 名前後であった。

日本肺高血圧・肺循環学会学術集会開催時に、小児肺循環のセッション（シンポジウムなど）をプログラム委員会で設定する。一般演題募集の時に小児肺循環のサブタイトルを設けて、演題応募しやすいようにする。

巽理事：毎回議論せずに共同開催という形にして良いか？

土井理事：小児肺循環研究会としては、第 7 回が現地開催可能であれば、第 8 回から統一の方向に舵を切りたいと考えている。2022 年に関しては、一般演題としては PH 学会として出している。

桑名理事：小児という枠の一般演題は小児肺循環研究会で発表してもらっている。

予算を組むうえで 1 つにするメリットがある。

巽理事：副会長に小児肺循環研究会の先生を加える？

土井理事：統一になった場合、そのようにお願いしたい

4. EASOPH に関して

2019年4月1st EASOPH 台湾 Kuo Yang Wang 先生の主催で開催した

2019年 第4回学術集会（渡邊裕司会長）の時に EASOPH joint meeting in Hamamatsu を開催した。韓国、中国、台湾、日本の4カ国が参加して、持ち回りでの開催予定とした。

2021年 第5回学術集会（土井庄三郎会長）2nd EASOPH を開催（本来、中国主催の順番であったが、諸事情により日本主催の開催となった。

2022年 桑名正隆会長の学術集会では EASOPH は開催しない。台湾 Kuo Yang Wang 先生のみが来日して学術講演会に参加する。瀧原圭子理事を加えて、台湾 Kuo Yang Wang 先生も加えて、今後の EASOPH に関して議論する。

Zhi-Cheng Jing (Clinical Thrombosis and Vascular Medicine Center, China) 先生は WHO world symposium でも重要な役割を担当しており、日本が EASOPH から離脱すれば、世界での立場を失う可能性も危惧される。

Wook-Jin Chung (Cardiovascular Medicine, College of Medicine, Gachon Cardiovascular Research Institute, Gachon University, Incheon, Korea) 先生は、PH 領域の発展に非常に積極的、瀧原圭子理事は韓国の学会に招請されている。

5. 八巻賞

八巻賞の出資源は東北大学の故 八巻重雄先生（PH 病理医）であり、下川宏明理事から本学会に八巻賞設定のご提案があり、これまで継続してきた。今後の八巻賞選定に関して、新理事会で審議して頂く？ 下川宏明先生からのご意見を願います。

八巻賞 9名 2016年～2021年（6年間）を選定した。

ほぼ理事関係施設からの選出であるが、適正な選定を実施してきた。

八巻賞 9名 2016年～2021年（6年間）

東北大学 2名、九州大学 1名、岡山大学 1名、慶應義塾大学 1名、国際医療福祉大学 1名、国立循環器病研究センター 1名、杏林大学 1名、千葉大学 1名

循環器内科所属 8名、呼吸器内科所属 1名

伊波 巧（杏林大学）、阿部 弘太郎（九州大学）、大郷 剛（国立循環器病センター）、田村 雄一（国際医療福祉大学）、杉村 宏一郎（東北大学）、片岡 雅晴（慶應義塾大学）、中村 一文（岡山大学）、佐藤 公雄（東北大学）、坂尾 誠一郎（千葉大学）に八巻賞は授与されている。

八巻賞は賞金として継続するが、金額は学会奨励賞、YIA 賞とも合わせて、今後継続議論が必要。

6. 学会奨励賞

学会奨励賞受賞者 15名 2016年～2021年（6年間）

千葉大学 4名、慶應義塾大学 3名、国立循環器病研究センター 3名、東北大学 2名、北海道大学 1名、岡山大学 1名、九州大学 1名

循環器内科所属 10名、呼吸器内科所属 4名、膠原病内科所属 1名、

学会奨励賞 基礎研究賞 3名、臨床研究賞 3名としているが、この2年間、特に基礎研究賞は3名に届かない年度もあった。また臨床研究賞 3名もギリギリの状態。特に基礎研究分野における論文業績は停滞している。

この6年間を含めて、日本の肺高血圧症の臨床、研究は循環器内科の先生方が牽引している。学会奨励賞受賞者には所属診療科で明らかな偏りがある。しかし PH 領域で努力されてきた先生方に奨励賞は与えられている。

小児循環器と言っても、PH に特化して臨床、研究を担当している小児科医はほぼゼロ。また、心臓血管外科も同様であり、外科領域からの論文は1本でも価値の高いものであるという考え方もある。膠原病内科領域、呼吸器内科領域も担当分野は広く、PH だけに特化している先生は皆無。

奨励賞は研究を奨励するというのが大きな目的。

特に、小児循環器、心臓血管外科、膠原病内科、呼吸器内科領域からの申請に関しては、当該論文1本でも応募可能として、選考委員会にて学会奨励賞に値すると判断できた場合は、受賞可能とする？

特に、学会奨励賞の3名枠が満たさなかった場合は、それも考慮して審議する？

学会奨励賞の応募資格を2023年度から下記のように修正する。

学会奨励賞応募資格

- 1) 日本肺高血圧・肺循環学会の会員であること。申請時において会費を完納した会員である者。
- 2) 英語論文業績（原則として当該年度）→ 過去3年間の業績を判定に変更
- 3) 複数の論文でなく、論文1本でも応募可能とする

巽理事：ヤンセンとの単年度契約で学会に資金が提供されている、次期理事長が資金提供会社と交渉する必要あり。

渡邊理事：奨励賞は 研究助成金という理解で良いのか？

巽理事：千葉大学の場合、八巻賞も学会奨励賞もシステム上研究費として入ることになっている、個人でなく講座に研究助成金として入っている。

福田理事：アクテリオンの時代から研究費として使っている。賞金ではなく研究費として明記するのが良いのでは

瀧原理事：多くの大学は、～～賞とつくと個人にお金が入る。50万は賞金としては多いと思われる

巽理事：学会奨励賞への応募がすくない。特に基礎分野。昨年は1件のみだった。外科や小児循環の先生方も応募しやすくするべき

福田理事：この10年で日本循環器学会一般演題は半減した。基礎研究も臨床研究も減ってきている。特に臨床研究は半減した。個人の賞でなく研究助成金としてまとめた金額にした方が良いと思われる。

下川理事：名称を変えて、まとめた研究助成金とすべきでは？

巽理事：PHの研究ができる施設が減ってきている。

瀧原理事：そういう意味で、賞金でなく研究費として授与して、3年後に学会で発表してもらう等は？

→下川理事、渡邊理事 賛同（YIAだと、この趣旨に合致する、YIA賞にも資金を回すことを検討）

下川理事：はっきりと名前を変えて、研究助成金とすべき

7. 今後の学術集会の在り方

日本のほとんどの学会において、これまでの学術集会は企業からの協賛ありきで運営がなされてきた。日本循環器学会のような巨大会社は多少のことではその基盤は崩れない。

しかし、日本肺高血圧症・肺循環学会はそのような訳にはいかない。肺高血圧症治療薬を販売している企業は薬の特許が切れると後発品に置き換わるため、この分野から撤退する。アンブリセントンのGSK、レバチオのファイザー（ヴィアトリス）はその方向である。カテーテル、デバイスを取り扱っている機器メーカーに協賛依頼はありであるが、企業収益は製薬会社とは大きく異なる。

8. 2025年度 日本肺高血圧・肺循環学会学術集会会長

歴代会長

- 2016年度 第1回、佐藤徹（杏林大学、循環器内科）
- 2017年度 第2回、西村正治（北海道大学、呼吸器内科）
- 2018年度 第3回、瀧原圭子（大阪大学、循環器内科）
- 2019年度 第4回、渡邊裕司（浜松医科大学、臨床薬理学）
- 2020年度 第5回、荻野均（東京医科大学、心臓血管外科）
- 2021年度 第6回、土井庄三郎（東京医科歯科大学、小児科）
- 2022年度 第7回、桑名正隆（日本医科大学、膠原病内科）
- 2023年度 第8回、江本憲昭（神戸薬科大学、臨床薬学）
- 2024年度 第9回、福本義弘（久留米大学、循環器内科）

2020年9月25日の理事会議事録

2025年度の学術集会会長として、松原広己理事が適任ではという意見があり、松原広己理事は他に引き受け手がなければ会長を考慮することになった。

本学会は、多領域の専門医の集団であり、循環器内科からの候補を3年連続とするのはどうか、循環器内科以外の領域の先生方の意見も聞くべきではないかと理事長の意見があった。

松原広己理事より、2022年度の理事は勇退して評議員として学会活動を継続する意思があった。理事を田邊信宏に移譲して、2025年度の学術集会会長としてPH specialistである田邊信宏の推薦があった。

田邊信宏は 2025 年度 定年退任の年度になる。

学会理事に関して

瀧原理事

- ・理事の比率は各領域で決まっているはず。

巽理事

- ・本学会立ち上げの時に、伊藤正明理事、伊藤浩理事には、循環器内科の理事枠でなく会長経験者として理事になって頂いた。本来の理事数は 22 名でなく 20 名である。
- ・松原広己理事は岡山医療センターでの業務多忙であり、そちらを優先するために、本学会理事はご勇退とする。
- ・2022 年 4 月から理事枠 21 名に変更する。

学術集会会長に関して

瀧原理事

- ・これまでのスケジュールに乗っけると、学術集会の会長に関しては、本日の理事会でなく、学術集会開催時の学会理事会にて決めていた。
- ・会則を確認したが、学術集会の会長は理事である必要はない、評議員でも会長に選出可能である。

巽理事

- ・2025 年度の学術集会会長に関しては次回理事会で決めて頂く。

辻野理事

- ・大会長の決め方のルールはある程度決めても良いと思われる

巽理事

- ・理事会を会議として開催してきた時代は、学術集会開催前の理事会にて自薦、他薦で満場一致で決めてきた。
- ・学会長は理事に限定しない場合には、全会員に公募して理事会で審議する必要があるのではないか。（日本呼吸器学会ではこのようにしている）